



TITLE:

ジャン・パウルの現実否定と小説
形式：『カッツェンベルガー博士の
温泉旅行』-覚え書

AUTHOR(S):

池田, 浩士

CITATION:

池田, 浩士. ジャン・パウルの現実否定と小説形式：『カッツェンベルガー博士の温泉旅行』-覚え書. ドイツ文学研究 1969, 17: 1-25

ISSUE DATE:

1969-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184939>

RIGHT:

ジャン・パウルの現実否定と小説形式

『カッツェンベルガー博士の温泉旅行』——覚え書

池 田 浩 士

「この温泉旅行は、すでに一八〇七年と一八〇八年に書かれ、一八〇九年に最初に読まれた。あの数年は、古いドイツが、自分の子供たちにくわえられた血で血を洗うような殺戮を、自分自身の強化若返りのために利用したときだった。そうしたなかで、この本は、息苦しい湯治と政治の季節のさいちゅうに、陽気に考えだされ、陽気に世に迎えられたのである」——『カッツェンベルガー博士の温泉旅行』(Dr. Katzenbergers Badereise)の第二版のまえがきでジャン・パウルがこう書いたのは、死の三年まえ、一八二二年のことだった。

長篇『生意氣ざから』(Flegeljahre, 1804-05) が未完のまま作者の手をはなれて以来、ジャン・パウルの創作活動には、いちじるしい変化がみとめられる。それまでの牧歌的・夢想的な作品や素朴な青年の発展を描く教育小説風の長篇にかわって、哲学的なエッセイや政治論、教育論がつぎつぎと発表され、社会の動きに——もちろん独特のユーモアと特異な語りくちを駆使してではあるが——積極的にかかわっていかうとする姿勢が、はっきりと示されるようになる。神聖ローマ帝国の崩壊とイエーナの戦いを転機とする近代ドイツの最初の激動期は、人気作家ジャン・パウルをもはげしくゆりうごかさずにはいなかったのだ。もちろん、彼はこの変動のなか

に、明るい確かな展望のみを見ていたわけではない。むしろ、既存の秩序の瓦解と、それにもかかわらず生きのびていく古い支配体制は、彼のなかに複雑な反応をよびおこし、新しいものにたいする彼の態度は、しばしば混乱と困惑を示しさえする。彼の晩年の諸作品を特徴づけるグロテスクな形象と、辛辣な諷刺と、錯綜したユーモアは、この「息苦しい湯治と政治の季節」のなかにおかれた彼の動揺と苦闘を、如実に反映しているのである。

一八〇五年以後、死にいたるまでの二〇年間に書かれた少数の純然たる文学作品のうちでも、とりわけこの『カッツェンベルガー』は、いわばジャン・パウルの晩年時代の戸口に位置しており、歴史の変動の波をはじめてまともにかぶった時期に生みだされたものだけに、それ以前の彼の文学の特色を随所にのこしながら、他方は新しい要素を多分にふくむという、興味ぶかい混合体をなしている。三巻からなる作品の各巻のうしろに、物語の筋とはまったく無関係ないくつかの小品（Werken）をつけ加え、あるいはまた、登場人物のひとりである税関吏兼両替屋メールホルン（Mehlhorn）にちなんで各章をへ小計（Summula）と名づけるたぐいのやりかたは、すでに初期の作品以来くりかえし作者が用いている手法である。けれども、こうしたジャン・パウルの特有の構成のなかでくりひろげられる物語は、もはや、たんなる皮肉をふくんだ牧歌や夢想ではない。それどころか、はじめな現実と美しい夢との断絶を悲嘆と抗議をこめてあばきだそうとする試みでさえない。それは、新しい方向を見出せぬまま、だがともかくも、生きのびようとする古い現実全体を夢想にふける作家としての自分自身の存在もろとも、否定しさろうとする実験なのだ。

ジャン・パウルの諸作品で中心的な役割を演じる多くの人物たちとはまったくちがって、カッツェンベルガー博士は、文学だの芸術だのとはおよそ縁のない人間である。「なるほどわしもひとりの芸術家〔Artist〕にはちがいないが、しかしそれは、医者〔Arzt〕という語がその台なしにされた短縮形である、というかぎりではなしであって、じつはただの人間医兼獣医にすぎんのだ。」（212頁）ところが、その彼が「七月一日に自分の馬にひかせた馬車で娘とともにマウルブロン温泉へ旅立つひとりの学者が数人ないしはそれ以上の旅の道づれを望んでいる」（89頁）という広告を週報にのせたとき、ただひとり募集に応じてきたのが、有名な詩人トイドバツハ（Theudobach）の親友と名のるフォン・ニース氏（Herr von Nieß）なる人物だった。近日マウルブロンで自作の朗読会をもよおすことになっている詩人とおちあうために同地へむかう、ということだが、じつは、このフォン・ニース氏こそは、トイドバツハそのひとなのである。カッツェンベルガー博士のひとり娘テオーダ（Theoda）が熱烈なトイドバツハのファンで、その彼女が詩人に送ったファンレターを読んだトイドバツハは、この娘に興味をおぼえ、詩人から返事を託された親友になりすまして、テオーダに会いにきたのだった。こうして、文学とは無縁な解剖学者と詩人の友人、じつは詩人そのひとは、おなじ馬車でむきあって旅をすることになる。博士の言い分によれば「おたがいに相手を容れあって、塩のようにたがいに中和させあう」（99頁）ことが期待されるのだが、その結果はいえ、物語がすすむにつれて両者のちがいがますます明らかになるばかり

で、それどころか、作者は、博士の冷徹な科学性を、詩人の多感性を否定する武器としてぞんぶんに利用しさえするのである。

ジャン・パウルは、そもそものはじめからこの詩人にたいして好意的ではない。詩人とウリふたつだと称するフォン・ニース氏は、テオードがその丁寧さと誠実さを信頼しこそすれ、けっして娘ごころをひきつけるような魅力をそなえた青年としては描かれない。彼は、彼女の想像のなかにある詩人のイメージとは大きくかけはなれた容貌と小柄な体躯の持主である。精神的な面でも、むしろ滑稽さを強調して描かれる。たとえば、旅の途上のフォン・ニースことトイドバッハは、たえず自分の名声を気にかけている名誉心の強い人間である。宿につくたびに、そなえつけの貸本のなかに自分の著書がないかどうかをさがし、見つけたすと大喜びでひそかにサインを残していく。旅をかさねるにつれて次第にテオードに惹きつけられてしまった彼は、一方では、温泉に着いてすべてを明らかにするとき彼女のおどろきとよろこびがいつそう大きくなるようにと、トイドバッハにたいする彼女の関心と懂がれをますますかきたてることに努めながら、他方では、ニース氏である当の自分がいっこうに彼女から愛されないのに心をくだき、「自分が自分自身以外にはどんな恋敵ももっていないことを喜んだ」(196頁)かと思うと、彼女が「作家だけを愛してその人間を愛さない」(192頁)のではないかと悩んだりする。この悩みは、彼がその一方ではあらゆる知恵をしぼって詩人トイドバッハにたいするテオードの愛情をつのらせようと苦心しているだけに、読むものの目にはもっぱら滑稽なものとしてしかうつらない。

それゆえ、ほんものの恋敵の登場によって彼がテオードをうしなうのは、むしろ当然のすじみちと言わなければならぬ。マウルブロンに到着すると、フォン・ニース氏は早速、トイドバッハの近作『より偉大な時代の騎

「HJ (Der Ritter einer großen Zeit) の朗読会を開催する。首尾よく終って拍手かっさいとなったところで、じつは自分がトイドバッハそのひとであると発表し、聴衆、なかんずくテオードを、おどろかせかつ有頂点にさせてやろう——彼の意図はこうだった。ところが、朗読のさいちゅうに、この詩のなかからぬけ出してきたようなひとりの軍人があらわれ、自分こそはトイドバッハだと名乗りをあげる。この青年は、プロイセンの軍人フォン・トイドバッハ大尉で、旅行中にたまたま新聞に「その著作によって有名なトイドバッハ氏がマウルブロン温泉を訪れる」という記事が出ているのをみて、てっきり自分のことだと思ひこみ、ニュースの出所をたしかめるためにやってきたのだった。それというのも、彼は、測量関係の技術将校で、この分野の著書を何冊か公けにしていたからである。フォン・ニースは、びっくりして、自分こそがトイドバッハだと主張するが、一方はその巨大な祖先——つまりチュートンの王である巨人トイドバクス (Theodobachus)——に似つかわしい勇姿でたちはだかり、他方は将棋の駒のようにちっぽけなからだをさらすのみである。その場にいあわせたすべての女性たちと同じく、いやそれにもまして、テオードはこの軍人にひきつけられてしまう。勝ち目がないのを悟った詩人は、齒をくいしばって姿を消す。

フォン・ニースこと詩人トイドバッハからの手紙で、彼こそがじつは詩人そのひとであったこと、彼は自分の本名「トイドバッハ・フォン・ニース」の名前の部分だけをとってペンネームとし、旅の道づれを願いでたときは本名を名乗ったのだということ、そして彼女をびっくりさせようとして詩人の友人をよそおいつづけていたのだということが明らかになっても、テオードのところは少しも晴れなかった。彼女は、自分の間違いのためにふたりのトイドバッハをとともに傷つけてしまったと感じ、それでいて大尉のほうに心がかたむくのをどうすること

もできなかったからだ。「フォン・ニースさんって、ひどいかたよ。あのかたこそが、あのかたがあたしを連れていってくださることになっていた詩人のトイドバッハそのひとだったのです。当節の殿がたや、ものを書くかたって、こんなものなのだわ！　こうなってはもう、いくらかまじな劇作家だって、俳優とか、なにかいちばんずるい泥棒とかよりも正直だとはいえないわけね。善良な人間は、いったい何を信用したらいいのかしら？」（262頁）——出産をまぢかにひかえた親友であり税関吏メールホルンの妻であるボーナ（Bona）にあてて、テオーダはこのように書いたのだった。そのボーナは、テオーダの便りから判断して、フォン・ニースではなく大尉のほうがあなたにふさわしい人だと思う、と伝えてくる。「理性的できちんとした人物、夢想家ではない人物」（236頁）、これを選ぶように、というのだった。これ以後、もはや物語のなかに詩人トイドバッハは姿をあらわさない。名誉にとらわれた夢想家は、こうしてテオーダをうしない、テオーダは、詩人に夢中になった娘時代の一期と別れをつけて、現実的で理性的な大尉の生活領域にはいつていくのである。

○

詩人トイドバッハをことさらに「劇作家」（Bühnen-Dichter）とよぶジャン・パウルは、戯曲をけっして書かなかった自分自身を、フォン・ニース氏のたぐいから区別しようとしているかのようにみえる。「なぜ劇作家がそれ以外の作家よりもたやすく名誉心におぼれる阿呆となるのかを、劇作家のために明らかにしてやるため、ちよっと脱線してこの小計を使うことにしましょう。」（209頁）というような作者の註釈も、この見解を裏付けるも

のようである。さらには、トイドバッハのことを「周知のようにシラーおよびコッツェブーとともに、フランスやギリシャの三大悲劇作家とならび称せられるドイツ三大詩人のひとり」(94頁)である、と紹介する作者は、この滑稽な人物によって、ある特定の実在の詩人を諷刺する意図をいだいているかのような印象をさえあたえかねない。

だがしかし、こうした規定を否定する重要な手がかりは、主人公カッツェンベルガーという存在のなにかくされている。なぜなら、これまでの生涯のうちでただ一度、ギムナージウムの最上級生のころにひとりの少女が好きになってすんでのところまで詩^{ごころ}をおこしそうになった彼は、「いつまでもこんなふうにあたいのことを想ってくれる、アマンドゥス？」と彼女に問われて、「とんでもない、きみのことなんかじゃなくて、おれたちふたりのことを想うさね。」(107頁)と答えて失恋してからこのかた、ただの一度も詩をつくらうなどと考えたことはなく、つねに事物を客観的に、科学的に見つめ、かつ表現することを、生活原理にしているからだ。カッツェンベルガーは、科学性と即物性の権化であり、夢想と詩的な態度の対蹠物である。ニス＝トイドバッハは、じつはこのカッツェンベルガーの世界観を裏面から補完する存在にほかならないのだ。⁽³⁾

ところが、カッツェンベルガーのこの即物性、科学性は、現実には、彼を皮肉屋に、不愉快なことを言う人間にしてしまう。「残念ながらわしは、馬車のなかでなりその他なりで、だれかれにとなく、いわゆる不愉快なことを言うものだから、皮肉屋だという悪評をたてられるという不幸をせおっておりますのじゃ。」(100頁)そして逆に、世間の彼にたいするこの評価は、彼をますます世評を気にせずものに動じない人間にしてしまう。「だが彼は、酸っぱい顔を、なににもまして気にしない性分だった。言葉になって出る彼の息のうちかなり大きな部分

をしめる健康な酸素が、彼をそれに慣らしてしまったのだ。」(109頁)

彼の言葉や行動が「健康」なものであればあるほど、そして彼の動機や目的が科学的なものであればあるほど、彼はますます周囲の人間たちの「酸っぱい顔」に耐えなければならぬ。たとえば、旅の第一夜をすごした宿屋での出来ごとがそれである。かたすみの階段に貴重なネコの巣があるのを見つけた彼は、解剖するために子ネコをこっそりぬすみだそうとする。ところが、このまえ十一度目にこの宿に泊ったとき彼がいなくなるのといっしょに母ネコがいなくなったのに気づいていた宿のおかみが、あとをつけてきて、まさに子ネコをポケットにねじこもうとしている瞬間に彼をとりおさえてしまう。さあこれで犯人がわかった、といきまぐ女主人に、彼はすこしも動じることなく委細をつぎのように説明するのである——「わし自身も母ネコを何匹も飼っている。そしてそいつらを、切りきざんだりするのではなく、父親として養ってやっている。それは、交尾期に、広い鶏舎のなかで溜息をついているメスネコたちをつかって、強い立派なオスネコを屋敷内におびきよせ、これらのジークヴァルトたちを、彼らの尼僧たちのいる修道院の格子窓のそばで、鉄ワナや狐ワナにおとしてつかまえるためののだ。なぜなら、自分は、教授であるいじょう、そういうジークヴァルトたちを、あるいは生きたまま、あるいは絞め殺して、自分の解剖刀のために調達せざるをえないからだ。なにしろ、自分は、自分のたずさわっている科学のためにはあまりにも柔和なところをもっている、犬を殺したり、いわんや生きたまま解剖したりということは、ネコのばあいのように出来かねるからだ。」(110—111頁)これをきいた女主人は、ただこうつぶやいただけだった——「行ないにふさわしい名前をもっておいでだよ。まったくいけすかないネコカクシのネコ
クロッ [Katzen-Berger und -Würger]。」(111頁)

ところで、「カッツェンベルガー」という名前のこのような由来にも示されているように、この主人公には、あまりにも作爲的な要素がつきまとっている。彼の言動のすべてが、わざとらしく、極端で、誇張にみちている。たしかに、ある場合にはそれが、カッツェンベルガーという人物から、生きた人間というイメージをうばいとる働きをしていないとは言えないだろう。「博士の辛辣さ、迷いない単刀直入なやりかたと、悪意にみちた手口とにてらしてみではじめて、ジャン・パウルの自分の心臓ポリプの癒着の危険にたいしてどのような諷刺的な武器を——ユーモラスで純粋に詩的な武器のほかに——もっていたかがわかるのだ。ここでは、解毒剤と治療薬はあまりにも集中的に用いられすぎているため、カッツェンベルガーは、ある種のリアリズムにもかかわらず、生きた人物という説得力をそれほどもっていないほどである。なぜなら、彼の異常さ、彼の考えぬかれた偏屈さ、彼の独創性、彼の自然科学的な性格の不気味なまでの徹底性、ユーモアによってはほとんど八温かく／＼ならない彼の決然たる冷静さ、彼の老獪なエゴイズム、あらゆる感情的なものや非合理的なものを完全に科学性によっておきかえてしまう彼のやりかた——これらは、ひとりの人間の側面としての説得力はもって、存在そのものだという説得力はもたない。」ヴェルナー・シュミッツのこの指摘は、それなりにきわめて正当であるといわなければならない。

だがしかし、はたして作者の意図は、ひとりの生きた人物／＼をつくりあげることにあつたのだろうか？ むしろ、写實的なまとまりをもった人間像をではなく、彼の異常さ／＼、彼の偏屈さ／＼、彼の冷静さ／＼等々を、はかならぬそうした側面／＼をこそ、ジャン・パウルは描きだそうとしたのではあるまいか？ 少なくともカッツェンベルガーを現実存在しているような通常の人間として描こうとする態度は、作品をとおして見るかぎ

り、どこにもみあたらない。それどころか、誇張された行動や、長広舌や、作者自身がつけ加える註釈によって、ひとりのいわゆる生きた人間、自然な均斉のとれた人間としての完成度はことさらに破壊され、グロテスクなまでに一面的な人物が、むしろ意識的につくりだされていくのである。そして、きわめて作爲的な作品の構成そのものと、各所にちりばめられた不自然な筋のはこびや語りくちが、故意につくりあげられ理念化されたものという印象を、さらにいっそう強くする役割をはたしている――

「第二十九小計　フォン・ニース氏

彼は夕食にやってこなかった。」(209頁)

というたった一行の極端にみじかい△小計▽や、あるいはまた、

「〔……〕これを駁者が耳にしたとき、どうしても自分が追いつけないでいる税関吏がもうずっとまえから動く罪人さらし柱とも見え時限爆弾ともうつっていた彼は、ギャロップで

第十二小計

――アヴァンチュール――

のなかへと駆けこんでいて、かたむいた境界石に馬車をガクンとぶつけ、まるで箕でふるったように軽々と馬車のなかみをぶちまけてしまった。」(120頁)

というようにふたつの△小計▽にまたがる文章。「読者をあまり盛りだくさんのまじめな話や政治の話で緊張させ疲れさせてしまわないために、馬たちが夕餉のパンと夕餉の水とをもらった小さな町へ―フラインでおこなわれたさして重要でない一幕の海戦のことをお話することにして、全体の調子をくるわせない程度にここで短い

中断をおこなっても、さしつかえありませんまい。」(78頁)という一節などに示された、語り手としての作者の存在の強調。前述のような由来をもつカツツェンベルガーの名前をはじめ、ガニ股で両脚が zirkumflektieren している馭者のフレックス (Flex) や、「語源的にみてただ性のちがいがいしかない」(124頁) テオードとトイドバッハなど、ほとんどすべての登場人物につけられた、わざとらしい奇異な名前。これらはすべて、おおまじめで述べたてられことごとしく説明を加えられるほど、それだけますます滑稽さと不自然さを強調するはたらきを増し、一種の異化作用をひきおこすのに役立つのである。

カツツェンベルガーの特性である科、学、性、や即物性¹は、じつは、このような異、常、さ、不、自、然、さ²に支えられているのだ。彼が観客性や科学的な道理をつらぬこうとすればするほど、彼の存在は、あるいは滑稽な、あるいは不愉快なものとなり、グロテスクな度合いを加えていく。それは、詩人の夢想のなかの調和した世界、たとえば八より偉大な時代の騎士Ⅴのイメージなどとは、なんの縁もない。(それゆえにこそ、博士は、トイドバッハ大尉と娘テオードとの結婚を、大尉の人物をみてではなく、彼の莫大な財産を知って、許すのである。) 詩人の対蹠者としての解剖医カツツェンベルガーは、徹頭徹尾、極端な、調和のない、不自然で奇形とさえいえる世界に、とどまらざるをえないのだ。

○

それゆえ、カツツェンベルガーが奇形児にたいしてきわめて強い関心をいだいているのも、けっして偶然では

なる。彼は、『Thesaurus Haematologiae』(造血作用について)、『Fasciculus exercitationum in rabient caninam anatomico-medico-curiousarum』(ジャン・パウルは「恐水病について」というおおよその訳をつけている)のほか、『De monstis epistola』(奇形児論)の著者として知られている。医者である彼にとって、奇形児というものは、生まれつき科学のために役立つようにできている貴重な存在なのだ。「なぜって、わしは、もっとも高貴な生まれの人間から学ぶよりも多くのことを、奇形児から学ぶことができるのですからな。」(198頁)だからこそ、彼は、同席のご婦人がたが眉をひそめ吐き気をもよおそうになるのもかまわず、食事の席で、奇形児についての学問的蘊蓄をかたむけもすれば、生きているものであれ死んでいるものであれ奇形な存在とさえみれば目の色をかえて、それを手に入れようと、方策のかぎりをつくしもする。

二日目の宿の主人は、博士が奇形児にたいしてなみならぬ関心をもっているのを知ると、八本足で走る奇形児の剥製をお世話しようと申し出る。それは、背中あわせにくっついた一對のウサギで、町の薬剤師のものであった。カツェンベルガーは、頭がふたつ、耳が四つあるこの「複合ウサギ」(Doppelhase)もしくは「同盟ウサギ」(Alliance-Hasen)をなんとかして買いたいと思うが、相手は、有名な改鑄ルイ金貨とでなければ絶対にいやだと言いはる。その金貨とは、ルイ十五世の時代に、先王ルイ十四世の肖像のうえに環をひとつ刻みこむことによって、従来の十六リールではなく新たに二十リールとして通用するように改められたものだった。しかし、このようなめずらしい貨幣は、博士にしてみればそれ自体ひとつの奇形児なのであるから、彼はどうしてもそれを手ばなしたくない。そこで、複合ウサギをもルイ金貨をも自分のものにするため、薬剤師およびそのふたりの助手をむこうにまわして、狡智のかぎりをつくしたかけひきをおこない、ついにウサギの剥製をタダで強奪

してしまふ。

カツェンベルガーのこうした奇形児にたいする執着は、もちろん、人間にかんしても同様に強い。自分が社交の場に出て婦人たちに注意をむけるのは、そのなかになにか化け物モンスターが居りはしないか、という関心からにはかならない、と明言して婦人がたの憤激をかうばかりではない。かねてから名付け親をたのまれて、なんとかしてことわろうと思っている税関吏メルホルンから、その妻ポーナが無事に出産したことをきかされたとき、まずまっさきに念頭にうかぶのもこれである。「彼は、子供の誕生という事態にぶつかると、いつでもきまつて奇形児のことが頭にうかぶものだから——そういう奇形児なら、彼は大喜びでウブ湯からだきあげて、アマンドゥスという自分の名をさずけてやるだろうに——すくなくとも二、三カ所くらいは科学上の奇形があるかもしれないという可能性に期待しながら、もう負けたよというような口調でたずねた、へばうやは、きっと、このうえなく正常なからだをしているんじゃないやろね?」(231頁) 彼にしてみれば、国家が奇形児の保存や蒐集を奨励しないのが不服でならない。いわんや、花のばあいにはそれがおこなわれているのに、新種の奇形児をつくりだそうとする努力がすこしもなされないのは、不合理だと思えない。「もしもそれ以上にたやすく手にはいるてだてがないというのなら、いっそわしは、女性の奇形児と結婚したっていいと思っている。それにね、テオードヤ、わしはおまえにかくそうという気はさらさらないのだが——というのもこの一件は純粹に科学への愛情から出たことなんだし、それにわしはちょうど例の *Epistola de monstis* を書いてるさいちゅうだったものだから——おまえの亡くなった母さんが身重だったあいだじゅう、二本足で立って踊りをしているクマだの、サルだの、あるいは小さなもろものこわいものや、わしの標本陳列室の貴重品を、母さんから遠ざけておくことにそ

れほど気をつかいはしなかったのだよ。なにしろ、最悪のばあいでも、母さんはわしの陳列品を、奇形の子宝ひとつぶだけ豊富にしてくれるだけだからね。ところが、残念ながら、いや、わしはこう言おうと思ったんだ、ところがありがたいことには、母さんはおまえを授けてくれたのだった。それは、妊娠中に、かたわを生むのではないかといちばん心配した母親が、通常いちばん美しい子を生む、というラヴァーターの見解を、ちゃんと裏付けるものだったわけさ。」(124頁)

奇形の子供をもつことさえ辞さないカツンベルガーのこの奇形児への執念は、ほかでもない、彼の「科学への愛情」にもとづいている。奇形児は、「まずなによりも第一に、有機体の身体構造を、ほかでもないゴシック風の建築様式からの逸脱をとおして教えてくれる存在」(124頁)なのだ。それどころか、それは、けっして自然に反したものではない。「奇形児が生きのびられないのは自然に反しているからだ、などとおっしゃってはいけません。どんな奇形児だって、かつては自然にそくしていたはずだ。そうでなければ、生をうけてこの世にあらわれるまで生きのびてなどいなかったでしょう。」(同) 奇形児を奇形ときめつけ、不自然だとしてしりぞけてしまうのは、独断というものではあるまいか？ 奇形児のなかにも永遠の自然法則がかくされているはずであり、逆に、奇形でない正常な存在とみなされているもののなかにも、奇形な要素がひそんでいるとはいえないだろうか——正常と異常との規準をこのように相対化してしまうカツンベルガーは、奇形児を抹殺するのではなくむしろ多様な世界の一要素として積極的にむかえいれることを要求する。「ああ、たぶんわれわれのだれものなかに、奇形児になる端緒がいくつかあるのです。だが、それらは成熟しない。背骨の末端、つまり尾底骨は、たとえばサルのシッポのはじまりです。また新生児のあたまには、ビュフォンの言うところによると、ツノ

になるような角質の物質がみられる。残念ながらブラシをかけているうちにきれいにとれてしまうのですが。ところが、だれもかれも、ただ自分と同じものしか見ようとしないうちに、それ自体でちゃんと目の保養になるはずの多様性には心をはらおうとしないのです。言ってみれば、そうした多様性は、もしもわれわれのだれもがいくらか歪んだものを身につけていたら、この温泉の食卓でもあじわえるわけですがね。たとえば、あるものは鼻のかわりにキツネのシッポをくっつけ、またあるものは顎のしたに弁髪を結い、また第三のものは鷲のツメを、第四のものは、月次なやつではなしに神話にでてる本物のロバの耳をもっているとしたらね。わし個人はといえば、白状してもさしつかえないでしょうが、醜い鳥人となって、奇形の侍臣団や部隊の先頭を歓声をあげて歩き、もしもわしが（つまり肉体的に）他の人間とおなじではなく、背中にフタコブラクダとヒトコブラクダとが、つまり三つのコブがいちどきにつらなって山脈をなしているか、あるいは自然がわしの背中に生まれつき女性をひとり、同時に前方には十二本の指を与えてくれながら、くっつけてくれるか、あるいはもしもわしが、そのほか多くの奇蹟を、わし自身の身にも他人の身にも、さずけられているとしたら、さぞや神さまに感謝することでしょうな。もっともこれは、わしのからだにこうした生きた自然標本陳列室がくっついていてもなお、ミツバチが花の奇形のうえにとまらざるをえずとまることができるように、わしの通常の医者としての分別がちゃんと残されているかぎりではなしですがね。しかしながら、わしの精神は、わしの肉体がよく整っており、まわりの人びとの目にきわめてありきたりの刺激しかふりまいていないということによって、なにか得るところがあるのだろうか？——なにもありません。精神は、もっとまじな肉体をさがしもとめているのです。」（198—

199頁）

この長広舌のなかで、カツツェンベルガーは、奇形を擁護することによって、奇形を奇形としかみなさぬ「正常」な価値観の否定にまでつきすんでいる。彼の科学的な態度が、つねに世間一般からは皮肉として、不愉快なものとして受けとられる、ということをおこさなければならぬ。科学への愛は、目の前の現実とすると対立し、これを否定しないではないのだ。奇形がなんら奇形ではないところには、たんに、奇形をも正常なものにふくめた「多様性」を現出する道がひらかれるばかりではない。価値の相対化は、正常とみなされているものこそ実は奇形なのだという、価値の逆転にまですむ可能性を、つねにひめている。奇形児の友カツツェンベルガーは、その徹底した科学性のゆえに、既存の秩序の敵となるのだ。「お歩きあそばすことです、トノサマ。騎馬でわたらせられるのとお車をお召しになるのとの、中庸の道でございますからな」——どんな運動がいちばん身体のために良いだろうか、とたずねるマウルブロン領主に、カツツェンベルガーはこう答える。「じやが、余は毎日歩いておるが、あまり役には立たんようじゃぞ」と太ッチョの殿様はおっしゃる。「おそらくその理由は」と博士は言うのだった、「拝察いたしまするにトノサマがおみ足だけでお歩きになっているからでございます。それには、ある意味で不利な点がございまして——（領主は博士をいぶかしげに見つめた）と申しますのは、同時にお手もお使いあそばして歩みかつ運動なさる必要がございますので。なにしろ、われわれ哺乳動物は、肉体という点から見ますれば、四足動物でございまして、それにつきましては、かのモスカーティ（パドヴァ大学の医学教授）が、誇張をこめてではありますが、きわめて適切に証明いたしておるとおりなのでございます。」（272—273頁）封建領主を這いつくばらせるような思想が、どうして「正常」と認められえようか。

異常なものが実は異常ではなく、むしろ正常とされているものこそが異常なのだ、という確認によって現に支配している体制や価値観を否定しようとするやりかたは、ジャン・パウルの作品にしばしばみられるものであり、とくに『温泉旅行』の新しい要素というわけではない。しかし、従来の作品では、こうした現実否定の方法とならんで、もうひとつの側面からの否定の試みが、なされるのがつねだった。すなわち、現実をはなれて高く飛翔する詩人の世界からちっぽけな地上を見おろすという方法である。初期の牧歌的な作品では、この詩的な夢想自体が主要な部分をなしていたし、円熟期の大作では、ほとんどつねに、正反対の性格をもつふたりの人物を設定することによって、これらふたつの側面からの現実批判が試みられたのだった。ところが、この『温泉旅行』では、従来ならその一方の批判を担当するはずの詩人が、もっぱら否定的な役割しか与えられず、批判者の任務は、カツンベルガーひとりひきうけているのである。

こうした事実のなかに、われわれは、たんに感傷的でそのくせ俗物性にみちた詩人というものにとたいする作者の批判と自己批判を見るだけにとどまらず、さらには、詩的な空想や抒情を媒介とした現実とのかかわりかたそのものにとたいするジャン・パウルの疑念をも、かいまみるることができるのではあるまいか。時代の急激な変動は、ジャン・パウルから、主人公の歩むべき発展の道を壮大に設定して教養小説を完成させる可能性をうばっただけではない。高く天空にのぼって世界を一望のもとに鳥瞰する道をも閉ざしてしまったのだ。展望をたてるこ

とができないままに、動いていく現実のまっただなかにいてそのひとつひとつの事物や事件を、執拗に追及しつづけるしかなかったのである。⁽⁵⁾「あのひとの頭は、心が愛するために生きているように、知ることのために生きているのですわ。」(114頁)というテオードのカッツェンベルガー評は、きわめて暗示的だといわなければならぬ。あくまでも「知ること」に徹し、科学的、客観的でありつづけようとしてグロテスクな言動をつづけるカッツェンベルガーこそは、激動のなかで、その激動から逃がれようとしてのがれるすべもないまま、諷刺と苦いユーモアにみちたグロテスクな形象をつくりだすことによって、現実の歪みをひとつひとつあばきだし、それと対決し、それに打撃をあえたようにとしつづけたジャン・パウルの、戯画化された、だが、きわめてリアリスティックな、似姿だとは言えないだろうか？

カッツェンベルガーの△温泉旅行▽そのものが、名付け親になるという所詮はのがれられない事態(ボーナは幼くして母をうしなつたテオードの乳姉妹なのだ)からなおも逃がれようとする試みであると同時に、あばきだし対決し打撃をあたえる目的でなされたものだった。カッツェンベルガーは、じつは、温泉へ「遊山の旅」にでかけるのではない。「業務上の旅行」をするのである。というのはつまり、彼の著書を批判した男を、そこできがしだし、したたかにぶんなぐり、そいつの名譽をふみにじってやるためののだ。その男というのは温泉医者(Badarzt)のシュトゥリキウスで、彼は、博士のあの有名な三篇の傑作を、七つの新聞紙上でこきおろしただけでなく、博士の反批判にたいする七つの返答ないしは再批判のなかでも、けち、よんけち、よんにけなしたのだった。「ドイツ語の Strick [絞首台送りの悪党] を避けようとしてわざわざラテン語尾の名前用長裾をひきずっている」(191頁)このシュトゥリキウス (Stykins) は、博士にしてみれば、「薬でなおしてやりたいとは思わな

かった最初の患者」(193頁)であり、その名の示すとおりまったく絞り首にでもしてやりたいほどの憎い相手だったのである。「アルゲマイネ・ドイッチュ・ビーブリオテーク、オーバードイッチェ・リテラトゥーアツアイトゥングその他にシュトゥリキウスが書いたすべての批判にもましてこの柔和なカツツェンベルガーを怒らせたのは、彼の学のある反批判にたいする長たらしい、粗雑な、陰險な、そして遅れに遅れた回答だった。なぜなら、博士にとっては、実生活のなかでさえ、ただ科学だけが大切だったのであり、いわんや科学そのもののなかではなおのことそうだったからだ。」(190頁。傍点は引用者)「柔和な」博士も、自己の生命であるこの科学の問題にかんしては、徹底的に相手をやっつけずにはいない。温泉に着いてからも、なんとかかんとか言いくるめて自分がその批判者ではないと博士に思いこませようとするシュトゥリキウスを、彼は一步一步追いつめ、意地悪くせめたてる。彼にとって、温泉医者は、諸悪の根源であり、卑小さの権化であり、現実のみじめさそのものだったのだ。「彼〔シュトゥリキウス〕は、生まれつき小さくできている数少ない魂のひとりだった。ところで、魂というものは、拡大鏡のレンズみたいなものである。つまり、レンズが小さく微小であればあるほど、それは事物をより大きくひきのばして写しだす。これと同じく、心や目が小さければ小さいほど、それらはもっと小さなものをもますます大きくうつしてしまう。拡大レンズは、大きなものに出会うとダメになる——おそろくこのことは、領主たちにひとつの暗示をあたえることだろう。領主たちというものは、とかく、自分自身と世間とのまえに大きな姿をとって立ちあらわれたがるものだから、そのために、充分小さく磨かれて著しく拡大してなめるようにつくられているような人間どもを、好んで求めたがるものだからだ。」(290頁)——支配階級にたいする皮肉をもこめたこの一節は、カツツェンベルガーの敵が何であつたかをよくあらわしている。ちっぽけであれ

ばあるほど、ますます大きなふりをしたがる存在。小国を支配するハボケット判封建領主Vと、それに追従する小官僚——殿様にたいする博士の堂々たる対しかたにどきもをぬかれた温泉医者シュトゥリキウスは、また、領主所有の観光用洞穴を管理する「洞穴目付役」(Höhlen-Aufseher)でもある。

もちろん、カツンベルガーの戦いに完全な勝利はない。彼は、ランプで照明された洞穴を見物している最中に、古生物ホラアナグマの顎骨をみつくて大よろこびするが、しかし、温泉医者兼洞穴目付の計略にひっかかって、頭上からランプをおとされて負傷しもある。とうとう最後に、シュトゥリキウスを追い詰め、吹矢やピストルをちらつかせて攻めたてるが、進退きわまった相手が、「例外といえるほどの奇形ではござらぬが、だれの腕にでもついているわけではない、六本指の手」(302頁)のミイラを進呈すると申し出てゆるしを乞うと、旅行の目的そのものだった殴打さえ断念して、ひそかに暖炉のうえにカンシャク玉をばらまき、破裂したときの相手のおどろきようを想像してはくそ笑むだけで引きあげてしまう。もともと彼にとっては、最終的な勝利は問題ではないのだ。だが、一定の冷静な損得勘定だけは決して忘れてはならない——「ざっと計算してみると、八本足のウサギを一頭——六本指の手を一本——それに娘婿の黄金指の手と、これだけを短い旅行のあいだに手に入れ、そのかたわら、これは決してついでにというわけではなかったが、シュトゥリキウスのペンを持つ手にぶつかって、これをうちすえる——それに洞穴のなかをのぞいてみれば、批評家グマではないまったく別のホラアナグマにでくわす。こういうことを考えてみると、七つの海を旅してまわった男だって、マウルブロン温泉への旅でわしが漁ったものより多くの収穫を得ることなど、できやしまい。この点でわしは、いくら神さまに感謝しても足りないくらいだと考えねばなるまいて。」(309頁)

カッツェンベルガーがおこなうことは、その結末のいかんにかかわらず、虚偽と矛盾をあばきだし、とことんまで追及し、糾弾しつづけることだけである。彼の徹底して科学的なものの見かた、シーカルなまでの、いやパセティックなまでの冷静さ、ひとを啞然とさせる博引旁証などは、すべて、この作業のために役立てられる。△旅▽という設定そのものが、目標である温泉医者はさておくとしても、道すがら出遭う事件や人物をとおして、もろもろの矛盾や俗物性をあきらかにし、カッツェンベルガーの追及の対象を豊富にする。一方では、このようにしてあらゆるものを主人公の眼前にさらし、即物的にその正体をあらわにしていこうとする試みがなされるとともに、他方では、ちよくせつ物語の筋とは関係のない△脱線▽や、それどころかまったく独立した△小品▽(Werchen)や△長詩▽(Polymer)などを付加して、あらゆる角度から問題に照明をあてようとする努力がなされる。

この作品より数年前に書かれ、それまでの彼の文学活動の理論的総括にもなっている『美学入門』(Vorschule der Ästhetik, 1804)のなかで、彼が長篇小説という形式について、まずまっさきに述べているつぎのような言葉は、『温泉旅行』の特色をよくあらわしている。「長篇小説は、ほとんどすべての形式がそのなかにふくまれ、そのなかでガヤガヤと弁じたてることが可能であるという、その形式の広さのために、純粹な形成という点では限りなく損をする。元来、小説は叙事的なものである。しかし、ときには作者のかわりに主人公が、ときにはすべての登場人物たちが、物語をする。」⁽⁶⁾純粹な形成という点ではどれほど不利であっても、あらゆることがらを盛りこむためには、小説はこうした混合形式でなければならなかったのだ。日記体や書簡体、独白形式、さらには牧歌や抒情的描写などが、ストーリーのなかで徹底的に駆使されて、一個の混然とした全体をなす。それどこ

ろか、ストーリーからはみだした独立の付録や補遺がつけ加えられ、それらすべてをふくんで一篇の長篇小説をなすことさえ、ジャン・パウルにおいてはまれではない。だが、『温泉旅行』には、もはやその△長篇小説▽という名称さえ与えられていない。カッツェンベルガーという主人公と同じく、この作品そのものが、極端な、グロテスクな、一個の奇形児なのである。

『温泉旅行』における作者ジャン・パウルの姿勢は、主人公がそうであるように、明確な展望をもって現実に対処していく、というものではない。それどころか、随所で、甘味な牧歌調への逆行や、むしろ保守的とさえいえる立場が顔をのぞかせている。たとえば、恋人たちの場面や、結末部分の抒情的な叙述。そして、テオーダの婚約者となるのは、なるほど甘ったるい詩人フォン・ニース氏ではないとはいえ、典型的なプロイセンのユンカー、△より偉大な時代の騎士▽たる軍人である。けれども、父親であるカッツェンベルガーがトイドバッハ大尉との結婚を娘にゆるすのは、相手が軍人だからではなく、税関吏メールホルンが調べてきて彼につたえた大尉の財産、膨大な地下の鉱脈のためである。「わしはまっすぐな人間だから、心のうちをすべてこの小さな舌にのせるのだよ。わしは、税関吏さんがいわれた地下の財産をこの目でみたいと思う。これを、わしの自然科学にかんする満足することのない性格を満足させるための口実だというふうに受けとっていただいてさしつかえないわけだがね。」(308頁)そしてまた、抒情的な牧歌は、カッツェンベルガーの辛辣な言動と混ぜあわさるることによって、逆に、ますますその辛辣さをきわだたせ、作品全体に多彩さと、未決定な両義的性格とを与える結果となっている。発展の進む方向をみさだめることができないままに、種々の古いモメントに足をとられながら、それでも現実を科学的に追究し批判し否定しつづけることをやめない人物と、その背後に立つ作者にとっては、こうした

て、以下においては、引用箇所ページその他は、すべて前記の Hanser 版にもとづくことにした。

- (2) ヴェルナー・シュミッツは、皮肉屋のカッツェンベルガーにたいする感傷的な対照者が詩人であるということは、当時の時流が感傷性というものを詩人のなかに見ていたという事実と、ジャン・パウ自身有感傷性というものを空想的な詩と結びつけていたという事実とによる、としている。そして、ニースの失恋は、作者が感傷的なものに与えた役割を説明している、と指摘する。すなわち、それは、皮肉とあざけりの的なものだ。(Vgl. Werner Schmitz : *Die Entfindsamkeit Jean Pauls*. Heidelberg : Carl Winters Universitätsbuchhandlung 1930. S. 85f.)

- (3) W・シュミッツ、前掲書八二ページ。

- (4) 『カッツェンベルガー』第一巻のうしろに付録としてつけられた五つの〈小品〉の第三、「生粋のドイツ的な洗礼名にかなする助言」(*Rat zu Urdeutschen Taufnamen*)のなかで、作者は、テオードという名の語源は〈theod〉(Vornehm=高貴な)であり、トイトバッハは〈theu〉(Volk=民族)から来ている、と述べている。(一五〇ページ)したがって、「性のちがいが」云々というニース氏の解釈とはくいちがうことになるわけだが、要すにここでは、いずれにせよこのふたつの名前が、人物たちの特性あるいは関係をあらわすために選ばれたものであることを、指摘しておきさえすればよいのである。

- (5) ヨハネス・アルトは、その『ジャン・パウ論』のなかで、『カッツェンベルガー』が書かれた時期のジャン・パウについて、つぎのように述べている。「ジャン・パウルにとって常に彼の世界像の規範的な部分をなしていた〈無双王〉フリードリヒの帝国は互解した。〔……〕フリードリヒの帝国とともに、ロココと、その最終段階と、弁髪時代の最後の現実が、同時に姿を消した。ナポレオンとともに、新しい時代が勝ちどきをあげながら歩みよってきた。若々しい現実のリアリティをまえにして、ジャン・パウルのあらゆる原則が、たがいに矛盾葛藤におちいった。つまり、彼の古くからの自由にたいする情熱と、革命の残酷さを目のあたりにした嫌悪感、彼の人間に対する信頼と郷土愛ならびに祖国愛、ナポレオンというヨーロッパ的現象にたいする熱狂と皇帝にたいするストイックな憎悪とが、近代的な理解と、古代的・ストア的理想とが、いまやジャン・パウルのなかで破壊的に交叉した。〔……〕まず最初に、弁髪時代の没落によって、たとえば部分的には憎むべきものであっても確実で信頼のおける最後の地盤が、ジャン・パウルの足もとからひきさかれていった。そのため、彼は、ナポレオン戦争によるヨーロッパの震撼を、ただ、ひとつの否定的なものとしか感じず、彼にのこされ

たものはいえは、もはや、経験と運命の痛みにふれて目が開かれた彼自身の知恵と、自分の家庭の小さな俗物的な垣根をめぐらしたサークルでしかなかった。地上にヘスペルスの世界をという彼のとはうもなく大胆な希望や、巨人の王国タイターンの夢や、ヴァーツとフィクスラインとヴァルトの牧歌的な至福が地上で実現できるという信念は、消えやうした。」(Johannes Alt : *Jean Paul*. München : C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung 1925. S. 344/346.)

(9) Jean Paul : *Werke*. Bd. V. S. 248.